

サイエンスサマースクールの表彰を祝い、さらに、 若者の理工系離れへの適切な対応を期待する

東北大学 名誉教授
星 宮 望
(東北学院大学・学長)



この資源小国日本は、今後、益々、「技術立国」を鮮明に掲げてゆかなければならないことは明らかである。その一方で、すでに広く認識されつつあるが、「若者の理工系離れ」が心配されているにもかかわらず、それへの積極的対応が不十分であることが大きな問題となっている。実際に、大学入学試験において、工学部系における志願者が急激に減少しており、その傾向はますますひどくなりつつある。このことは、国立・公立・私立にかかわらず各大学共通の現象であり、将来の日本にとって重大な問題である。

一方、「サイエンスサマースクール開催による地域理科教育の普及啓発」が、文部科学大臣から平成17年4月20日に、「科学技術賞 理解増進部門」において、我が国の科学技術の振興発展に顕著な貢献をしたとして、東北大学電気・情報系の内田龍男教授ほか4名が表彰されたことをお祝いしたい。青葉山の電気・情報系の1階の展示室に表彰状が展示されている。これは、東北大学工学部電気・情報系で長年にわたって取り組んできたことであり、大変喜ばしいことである。思い起こせば、中鉢憲賢名誉教授が現役のころにお世話役となり、当時の(株)国際電電(現、KDDI)の取締役であり、我々の先輩である小関康雄氏の全面的なご支援で実現の運びとなったことを記憶している。

一例として、平成11年(第6回目)実施時の計画・実行委員を拝見すると、(当時の所属・職名で)

- 代表者：中鉢憲賢(東北学院大学工学部教授)
- 委員長：内田龍男(東北大学大学院工学研究科教授)
- 幹事：二見亮弘(東北大学大学院工学研究科助教授)
- 副幹事：青木孝文(東北大学大学院情報科学研究科助教授)
- 委員：金井 浩(東北大学大学院工学研究科助教授)
他14名(KDD(株)東北支店長、(財)国際コミュニケーション基金の職員を含む)

となっており、多くの方々の協力によって実施された。
なお、事業の名称は、「たのしいサイエンスサマースクール ―光とエレクトロニクス―」であり、最近の若年層の理工系離れに対する一つの対策として、手作りの実験を通して児童・生徒に科学のおもしろさを体験させることを趣旨とし、夏休み中である8月の3日間にわたり、主に宮城県下の中学生を対象に仙台市科学館で行なわれた。実施した反響や成果としては、学校での授業や実験とは異なる新しい体験が得られたことへの喜びが感じられるなど、生徒側からの反応は非常に好評であり、このような企画を継続・発展させていくことの重要性が認識されたという。これまで、実施方法として、2泊3日の泊り込みでの開催や、3日間の日帰りでの開催など種々の試みが行なわれたが、一長一短があるようであった。この「たのしいサイエンスサマースクール」のような企画を、もう少し、幅を広げたり、実施母体を大きくしたりしてさらに発展させていくことが重要であると思われる。

上述のように、「若者の理工系離れ」は、一大学の問題ではなく、国立・公立・私立にかかわりない共通の重大な問題であり、この仙台市において、いくつかの工学系大学が共同で対処することを考えても良いと思われる。たまたま、東北学院大学では工学部で起案・申請した「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム『21世紀のキーテクノロジーを学ぶ』」(文部科学省/平成19-21年度)が採択され、具体的に動き始めている。これは、対象が中学生や高校生ではなく、彼らを教えている教員を対象にしているが、「若者の理工系離れ」への対応策の一つである点では、上記の問題と共通性がある。

このような背景を考慮すると、仙台学長会議、あるいは、学都仙台コンソーシアムの中の工学部会、あるいは、さらに絞って、電気系工学部会(仮称)などを設置して、新たに、「若者の理工系離れ」への対応策を数大学共同で行なうことを考えても良いのではなかろうか?これらを実施してゆくとすれば、東北大学電気・情報系が中心となって、東北学院大学工学部、東北工業大学などが参加する共同企画として実施することが良いと思われる。

是非、前向きにお考えいただければ幸いです。